

平成 21年 5月 15日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18310167
 研究課題名（和文） 男女共同参画社会における男性の「社会化」と暴力性についての研究
 研究課題名（英文） Study of men' s socialization and violence in gender equal society

研究代表者

氏名（ローマ字）：佐藤 和夫（SATO Kazuo）
 所属機関・部局・職：千葉大学・教育学部・教授
 研究者番号：90114496

研究成果の概要：男女共同参画社会を形成するにあたって不可欠な課題と言うべき男性の社会化と暴力性の問題を、ヨーロッパおよびアメリカ合衆国の研究と施策について、比較研究調査した上で、日本における男性の暴力予防のために必要な研究を行い、その可能性を学校教育から社会教育にまで広めて調査した。その上で、先進諸国における男性の暴力性に関する原理的問題を解明した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2007年度	5,600,000	1,680,000	7,280,000
2008年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
年度			
年度			
総計	14,700,000	4,410,000	19,110,000

研究分野：ジェンダー

科研費の分科・細目：ジェンダー

キーワード：男女共同参画社会、暴力、男性、社会化、ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

男女共同参画社会の形成にあたって男性の社会化が急速に求められている。しかしながら、男性の場合、長年にわたる、性別役割分業を前提とした労働形態や家族形態に適応してきたなかで、男女共同参画社会に十分に対応した新しい人間像なり、新たな生活形態や人間関係づくりが意識的に追求されてきているとは言い難い状況がある。

このことは単に学校教育の場だけでなく、職場における働き方や家庭生活における夫婦関係のあり方などにおいても、さまざまな困難を生み出している。その研究を進めることが男女共同参画社会形成に不可欠と考えら

れた。

2. 研究の目的

男女共同参画社会形成にあたって、男性の暴力性の問題については、暴力の原因にまでさかのぼる形での研究を行う必要がある。とりわけ、暴力そのものがふるわれないうにできる社会化がどのように可能かは十分に論じられてこなかった。

その問題を学校教育の問題も含めて研究する必要があると考え、暴力の予防が可能なシステム全体を包括的に考え、男性の社会に必要な文化的条件の明確化についての研究を目指した。

3. 研究の方法

(1) 学校教育における男女共学化の推進というだけにとどまらず、男女が現状のジェンダー的構造のなかで相互に置かれた状況を互いに十分理解し、葛藤や問題が生じたときに暴力を振るわないで話し合っているような心性を形成するためにはどのような教育が必要かについての研究が必要である。そのための具体的な教育カリキュラムがどのようになされるかについての実践的調査を行う。

(2) 現状の男性たちがしばしば暴力を振るってしまう条件についての調査を深め、その社会的・文化的条件がどのようなものであるかについての明らかにしていく必要がある。

(3) とりわけて、親密な関係にある男女や家族関係においての男性の新しい関係の作り方や暴力に訴えない話し合いの可能性についてさまざまな歴史的文化的経験の研究調査とともに、世界の暴力防止プログラムについての多様な試みを収集する。

(4) 男性が、暴力に依存しないで問題解決に向かう「社会化」について、成年男性が子育てや家庭生活への参加において、どのような試みが可能かについての調査研究をする。

(5) 近現代社会において男女間において暴力が振るわれる傾向が、現代の社会構造とどう結びついているかについて、戦争、性暴力、PTSDなどについての調査研究を行う。

4. 研究成果

発表論文や学会発表のみならず、三年度目の大きな成果として、ギリガン夫妻を日本に招き、ドイツの研究者も含めた国際シンポジウムを行い、千葉、東京、京都での討論と意見交流は、社会的に大きな影響をあたえた。

また、諸外国の暴力防止に係わる諸研究機関および研究団体との交流が深化し、国際的なネットワークができた。

さらに、暴力問題のアメリカにおける第一人者といっよいギリガン氏の著作の翻訳出版が行われ、共同研究者および連携研究者の著作が単行本としても出版された。

また、若者の暴力性に関する大量調査が行われ、貴重な成果が得られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 30 件)

1 佐藤和夫

「男性の育児休業取得と暴力性についての実証的調査」

『千葉大学教育学部紀要』第 57 巻 pp283-296, 査読なし

2 池谷 壽夫

ドイツにおける男女平等・ジェンダー・メインストリーミング政策の展開と男子援助活動 (その 2), 2009. 03, 『社会福祉論集』第 120 号, pp. 31-60. 査読無

3 池谷 壽夫

「ドイツにおける性教育の歴史と現状」、科研報告書『10 代の性感染症急増下の日本における性教育の実態と課題に関する研究』(代表橋本紀子女子栄養大学教授)、2009. 03, pp. 133-15、査読なし

4 小玉 亮子

「家庭生活と仕事の両立をめぐる学生たちの葛藤」『歴史地理教育』2009 年 2 月号、10-17, 査読なし

5 佐藤 和夫

「人間にとって教育とは何か」『総合人間学会誌』100-108、第 2 号、2008 年、査読なし

6 佐藤 和夫

「若者は戦争をどう「経験」できるのか」『教育』4-11、第 758 巻 2008 年、査読なし

7 池谷 壽夫

ドイツにおける男女平等・ジェンダー・メインストリーミング政策の展開と男子援助活動 (その 1), 2008. 08, 『日本福祉大学社会福祉論集』第 119 号, pp. 41-73. 査読なし

8 片岡 洋子

「女の子の関係をむずかしくするもの」『日本の学童はいく』2008 年 7 月号、24-29, 査読なし

9 小玉 亮子

「女性への暴力はどのようにして見えるようになったのか」, 日本生活指導学会『生活指導研究』25号, 53-69, 2008 査読なし

10 小玉 亮子

「近代教育とジェンダー——幼児教育における教育者養成システムの歴史から——」日本ドイツ学会編『ドイツ研究』第42号、pp. 27-35、2008.5、査読なし

11 折出 健二

「教育実践を創り出すリーダーシップとは何か」『生活指導』第663号、明治図書、2008年、42~49頁、査読なし

12 折出 健二

「他者との関係性能力ならびに共生・自治を育てる実践を探る」柴田義松監修

『新小学校学習指導要領改定のポイント』日本標準、2008年、100~105頁、査読なし

13 山田 綾

「スウェーデンにおけるジェンダー・エクイティのためのアクション・リサーチ1990年代プレスクール・プロジェクト」愛知教育大学研究報告、56(教育科学編)、2007年3月、pp. 229~238、査読なし

14 小玉 亮子

2007.3「西洋教育史における教育関係史の試み」教育史学会編『教育史研究の最前線』日本図書センター、pp. 204-213、査読なし

15 杉田 聡

「性アンデンティティの再任とセクシュアリティ」(榎本博明編集『セルフ・アイデンティティ—拡散する男性像』現代のエスプリ別冊、至文堂、2007年、180-188ページ)、査読なし

16 佐藤 和夫

Trabajo y vida de las mujeres japonesas en la era de la globalización

「千葉大学教育学部研究紀要」第56巻、293-300、2007年、査読なし

17 小玉 亮子

「子どもの現在——いじめ言説を問い直す——」20-28、2007年、査読なし

自治研中央推進委員会『月刊 自治研』

18 片岡 洋子

「女の子の友だち関係とその葛藤を考える」

『教育』86-91、2007年、査読なし

19 片岡 洋子

「親学」は子育て支援になり得るか『人間と教育』20-27、2007年、査読なし

20 重松 克也

「知識基盤社会における主体形成を促す社会科教育の教科目標」

「知識基盤社会における社会科の内容・領域に関する研究」10-20、2007年、査読なし

21 小玉 亮子

2006.11「母の日をめぐる近代家族のポリテイクス—二つの理想のはざままで」

金井淑子編『ファミリー・トラブル』

明石書店、pp. 119-136、査読なし

22 片岡 洋子

「ジェンダーに意識的な教育実践は何をひらくのか」2006.10

『唯物論研究年誌』第11号、査読なし

23 山田 綾

「はじめに」「調査の概要」「総括：調査結果をふまえた提言」『平成17年度 高校生
の職業情報・ネットワーク・男女平等に関する
名古屋市調査—一次世代育成支援から考える
男女平等教育のために—』名古屋市、
2006.9、査読なし

24 片岡 洋子

2006.8 「『荒れる』子どもをどうとらえたか—山崎隆夫の教育実践分析をとおして—

」、民主教育研究所年報第7号『現代の子どもと教育実践』190-207頁、査読なし

25 片岡 洋子

2006.8 「教育の場でのセクシュアル・ハラスメント防止の課題」、日本教育学会関東地区活動報告書『学校での人権侵害としてのセ

クシユアル・ハラスメントをどう防ぐか』

37-45 頁、査読なし

26 小玉 亮子

2006.7「ジェンダーの視点から見た市民活動の課題—横浜市の市民活動に関する2004年度調査から—」財団法人日本女性学習財団

『We learn』, pp. 3-6、査読なし

27 片岡 洋子

2006.6「男子校からの共学化過程に見る男女平等教育の課題」, 基盤研究(B)(1)15

310174 科研費補助金研究成果報告書『男女共同参画社会における男女共学化、共修化の研究』19-30 頁、査読なし

28 小玉 亮子

2006.5「親子関係を Gewalt という視点から考える」日本幼稚園協会『幼児の教育』第105巻、第5号, pp. 14-22、査読なし

29 小玉 亮子

2006.5「家族と暴力—近代家族の困難の中で—」教育科学研究会編『現代教育のキーワード』大月書店, pp. 98-99、査読なし

30 杉田 聡

「性交(射精)中心主義と強姦の合理化—アダルトビデオのイデオロギー」(唯物論研究協会編『ジェンダー概念がひらく視界—バックラッシュを超えて』青木書店、2006年、169-194ページ)、査読なし

[学会発表] (計 2件)

学会発表

1 佐藤 和夫

21世紀の唯物論のあり方について
唯物論研究協会 2008年10月24日
立命館大学

2 小玉亮子

男女共修家庭科の成立過程 第51回家庭科教育学会(静岡大会) 2008年6月29日

[図書] (計 9件)

1 池谷 壽夫

『ドイツにおける男子援助活動の研究』
大月書店、2009年4月、356ページ

2 小玉 亮子

2009.2 姫岡とし子・川越修編『ドイツ近現代ジェンダー史入門』青木書店(「ジェンダーと教育」pp. 103-124を分担執筆 総ページ数297) 2008.5

3 杉田 聡

『買物難民—もうひとつの高齢者問題』大月書店、08年9月、206ページ

4 杉田 聡

『AV神話—アダルトビデオをまねてはいけない』大月書店、08年7月、237ページ

5 杉田 聡

『「日本は先進国」のウソ』平凡社新書、08年5月、237ページ

6 折出 健二編著

『教師教育テキストシリーズ 生活指導』学文社、2008年、170頁。

7 折出 健二編著

『教師教育テキストシリーズ 特別活動』学文社、2008年、175頁。

8 小玉 亮子

泉千勢・一見真理子・汐見稔幸編『世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店(「PISAショックによる保育の学校化」pp. 69-88を分担執筆 総ページ数366)

9 山田 綾

「第6章 ジェンダー・バックラッシュと家族の言説」「第7章 アイデンティティと教育をめぐる政治—ジェンダー/セクシュアリティ問題が示唆するものとそれへの対抗—」(浅井春夫・子安潤・鶴田敦子・山田 綾・吉田和子『ジェンダー/セクシュアリティの教育を創る—バックラッシュを超える知の経験—』明石書店、2006.4、pp. 225-255所収。)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 和夫 (SATO KAZUO)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号 90114496

(2)研究分担者

(3)連携研究者

汐見 稔幸 (SHIOMI TOSHIYUKI)

白梅学園大学・こども学部・教授

研究者番号 70146752

宮本 みち子 (MIYAMOTO MICHIKO)

放送大学・教養学部・教授

研究者番号 60110277

折出 健二 (ORIDE KENJI)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号 20109367

杉田 聡 (SUGITA SATOSHI)

帯広畜産大学・畜産学部・教授

研究者番号 00171158

片岡 洋子 (KATAOKA YOKO)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号 80226018

山田 綾 (YAMADA AYA)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号 50174701

小玉 亮子 (KODAMA RYOKO)

お茶の水女子大学・大学院文化創成科学研究
科・准教授

研究者番号 50221958

重松 克也 (SHIGEMATSU KATSUYA)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号 60344545